
といぼっくす

ヒイラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
といぼつくす

【Nコード】
N0105I

【作者名】
ヒイラギ

【あらすじ】
いつもと同じ時が流れていくはずだった。真つ赤なミニカーに追突されるまでは。お姫様も一緒に、ちょっとした冒険？

はじめのあいさつ

おもちゃ箱の中にはね

みんなの知らない世界があるんだよ

子ども達が寝静まってから動き出す

なんて 童謡みたいなけちなことは言わない

朝でも昼でも もちろん夜でも

誰も見ていない時ならいつだって

そこにはいつも 誰かが居る

そこではいつも 何かが起こる

これはそんな世界の片隅の

小さな小さな住民たちの

小さな小さな物語

楽しんでいてね

それが 僕たちの仕事なんだから

I さんかくぼうしのあやつりにんぎょう

『ねえ、あれはなあに?』

僕の口が動き、僕のものではない言葉を紡ぎ出す。

「あれはちゅーりっぷっていうんだよ」

返事はすぐに返ってきた。

幼い男の子が一人、僕をきらきらした目で見つめている。

『ちゅーりっぷってなあに? 食べ物?』

僕は質問を重ねる。

「うっん、たべられないよ。おはなさんなの」

『おはなさんなの? 綺麗だね』

「そうだよ。ちかくでみると、もっときれいなんだよ」

『それは素敵だね! おはなさん、好き?』

「うん!」

につこり、という音が本当にしそうなほど、男の子は満面の笑みを浮かべた。

くう、と男の子のお腹が鳴った。

僕の後ろから、優しい女の人の声がする。

「そろそろご飯にする?」

「わーい!」

「じゃあ、サンにばいばーいって言おうか」

「サンはいいーい! またあとでね!」

視界がぐるりと回転する。

そのまま、僕は温かな暗がりへ落ちていった。

「お腹が減るって、どんな感じなんだろうな」

自分自身の声が出るようになったことを確認すると、僕は体を起こした。

肩を回しながら、特に目的地もなく歩き出す。

まあ、こるような筋肉もなければ、歩を進める足もないんだけど。主材料綿だし、足あつたら僕パペットじゃなくなるし。あれ、足付きのパペットってあるんだっけ？

え、じゃあ僕が移動するときは何て言えばいいのかな。

『歩く』じゃなくて・・・『浮遊する』？

なんかオバケみたいでやだな、それ。

そんなどうでもいいことを考えながら、僕はいつもと変わらないこの世界を見渡した。

散らかった子ども部屋なんかを「玩具箱おもちゃをひっくり返したみたい」という形容をする人がいるが、まさしくここは玩具箱、そのものの中だ。

そんなに広くないこの空間には、たくさんのおもちゃ・・・つまり僕みたいなのがそこかしこに居る。

友だち同士でおしゃべりしている子、歌を歌っている子、ただぼんやりしている子、などなど。

四方には、黄色の星が散りばめられた水色の壁。

視線を落とすと、ところどころ汚れた藍色の床が広がる。

頭上から時々、片付けられた友だちが降ってくることがあるから、

気をつけなくちゃ。

「……そういえば、僕もさっき片付けられたんだっけ。誰かにぶつかってはいないみたいだけど。」

ふと、自分の名前の由来である帽子が少しずれていることに気が付き、指のない手で位置を整える。

「三角帽子だから『サン』なんて、ひねりがないにも程があるよなあ……」

今までに何度呟いたか分からない台詞を溜息とともに吐き出して、僕はくーっと伸びをした。

もちろん伸びる筋もないけど、こつというのは気分だと思う。

さっき、あの子は「またあとでね！」って言ったから、今日はもう一回仕事があると考えた方がよさそう。

じゃあそれまで、一眠りしようかな……。。

「あつ、サンじゃない！ 帰ってきてたの？」

「……無理か。」

僕は声のした方に顔を向けた。

II ひめさまどーるとひのくるま

「相変わらずぼんやりしてるわね、あんたは」

波打つ豊かな金色の髪。ふわふわした薄ピンクのドレス。ぱっちりとした輝く瞳。

まさしく『姫』にふさわしい容姿がそこにあっただが――

「ねえミミ、お姫様が仁王立ちはどうかと思うよ」

「いいじゃない別に」

腰に両手をあててアハハと笑うその仕草は、ただのオテンバ少女だった。

ミミは本名を『プリンセスドール Mimi』といって、その名の通りお姫様の人形なのだけれど、この家の子は男の子一人だからあんまり遊び相手に選ばれないのだった。

だからって、毎度毎度僕を遊び相手にするのはやめてほしい。

「まったく、従姉妹の子が来た時ぐらいしか出番ないんだもの。やんなっちゃうわ」

「いいじゃない、のんびりできて。代わってほしいくらいだよ?」

あくびしつつそう言っていると、ミミは目を細めて僕を睨んだ。

そしてフツと吐き捨てるように笑う。

「あーあー、人気者はいいですねー。毎日のように出勤なさっているサンさんは」

「僕をさん付けするとややこしくない?」

「思うことそれだけなの!？」

驚かれてしまった。真面目に言っただつもりなんだけどなー。

「もういいわ。とにかく、私は今日もヒマしてるのよ!」

「僕はヒマじゃないんだけど」

「どうせ昼寝するだけでしょ? いいから私と遊びなさい! つー

か遊べ！」

びしつと僕を指差して命令口調。こんなときはワガママなお姫様だ。

僕は睡眠確保を諦めた。

ミミを怒らせたなら、そっちのほうで面倒だし。

もう一度あくびをして、仕方なく訊く。

「何する気なの？」

「あんたが決めなさいよ」

「ためらいなく言い切ったね・・・！」

普通考えとくだろ、誘うほうが。

「はーやーくー、早く決めてー」

あー、ちよっぴりご機嫌ナナメになってるなあ・・・。

まったく、本当にワガママなんだから。

そんなところも可愛いことは認めるけどさ。

「うーん。急に言われても・・・」

僕が真面目に考え出したとき――

その思考は、突然飛び込んできた車によって吹き飛ばされた。

「きゃあっ!？」

驚いたミミが僕の腕に抱きつき、その後すぐに身体を離れた。

心なしか頬が赤くなってる気がする。

プライドの高いミミのことだから、自分の行動に恥ずかしくなったんだろう。

走りこんできた車は華麗なターンをキメて、そのまま僕らの目の前で停まった。

すぐさまミミがくっついてかかる。

「ビリー！ あんたねえ、急に走ってくるんじゃないわよ、びつくりするじゃない！」

僕らの友人、真っ赤なミニカーであるビリーは屈託なく笑った。

「おう、悪い悪い！ この俺のあまりの美しさに驚いちまったか？」

「どこをどう解釈すればそうなるのよ！！」

相変わらずボケとツッコミみたいな二人だ。人じゃないけど。

前そう言ったら、ミニに殴られたからもう言わない。

それにしても。

ビリーはいつも、面倒ごとに首を突っ込みたがるからなあ。

なんだかやな予感がする。

サイドに描^{えが}かれた炎のマークを自慢してミニに怒鳴られているビリーを見ながら、僕は平穏な日々が続くよう祈った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0105i/>

といぼっくす

2010年10月10日00時32分発行